

「健康」「衛生」概念の普及とメディア・イベントとしての赤ちゃん審査会：戦前期の2つの写真帖を手がかりに

著者	大出 春江
雑誌名	人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	21
ページ	55-67
発行年	2019
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006821/

「健康」「衛生」概念の普及とメディア・イベントとしての赤ちゃん審査会 ——戦前期の2つの写真帖を手がかりに——

Penetration of Concept of Public Health (“Kenko” and “Eisei”) and Role of Babies’ Contest in Japan’s Pre-war Showa

大出 春江 *
OHDE Harue

<キーワード>

衛生, 健康, 展覧会, 赤ちゃん審査会, メディア・イベント

<要 約>

本論は日本で「健康」「衛生」という概念がどのようにして伝えられたのかについて戦前期の児童保護運動と結びつき開催された赤ちゃん審査会の写真帖（帳）を用いて考察する。病気や障害のない乳幼児を集めて身体検査をすることは日本で1910年代に行われ始めたが、1920年内務省衛生局主催の児童衛生展覧会が乳幼児の身体検査と表彰事業を全国に広げる契機を与えた。大阪府ではこれとは別に独自の取り組みがあり、大阪児童愛護連盟による赤ん坊審査会は児童愛護運動の一つとして実施された。その後、大阪児童愛護連盟は日本児童愛護連盟へと拡大し、全国的にこの催事をおこなっていった。大阪府堺市では大阪児童愛護連盟の協力を得て、堺市産婆会が主催する乳幼児審査会が1927年に開催され、以降も1942年まで同審査会と表彰事業をおこなった。

これら2種類の写真帖、すなわち1936年発行の『全日本児童愛護運動写真帖』と1928年～1942年発行の『堺市赤ちゃん審査会写真帖（帳）』を手がかりに、本論では健康な乳幼児の身体検査がメディア・イベントとなって、「健康保護」や「衛生」概念が伝えられていくこと、さらに児童愛護が健民運動へと変容していくプロセスを考察する。

* 大妻女子大学 人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻

1. 健康であることのメディアとイベント

本論は戦前期の児童保護運動と結びつき用いられた「健康」「衛生」という概念とその普及のために活用された赤ちゃん審査会について考察する。

乳幼児や乳児という言葉は、日常語というより統計や保健、検診、衛生、警察など公式の場で用いられることが多い。赤ん坊や赤ちゃんという言葉は口語では用いられるが公式の場では用いられることが少ない。この赤ん坊または赤ちゃんを冠した審査会は、戦前には「赤ちゃん審査会」その他の名称で、戦後は「赤ちゃんコンクール」の名で長期にわたり、大規模に実施された。戦前期の赤ちゃん審査会の誕生とその社会的背景については別稿で論じたが（大出 2017）、簡単にその内容をまとめておくことにする。

日本でもっとも早くこのイベントを始めたのは私立帝国小学校校長西山哲治である。西山は彼の留学先だったアメリカでおこなわれていた babies' exhibition という催事を、帰国後、日本でもおこなうことを思い立った。「赤ん坊展覧会」という名称で、1913（大正2）年から1927（昭和2）年まで毎年2歳までの子どもを帝国小学校に集め、医師による身体検査をおこなった（西山 1913）。これをより大規模に行ったのが内務省衛生局による児童衛生展覧会であった。内務省衛生局が主催した児童衛生展覧会は児童保護事業の一環として1920（大正9）年、お茶の水教育博物館で開催された。その附帯事業として約1ヶ月間、東京帝国大学医学部、慶應義塾大学医学部、千葉大学専門医学校その他の医員を動員し、6歳までの子どもを対象として身体検査が実施されたのである。

児童衛生展覧会に関連して補足しておく、内務省衛生局は「各地方に於て順次開催」することを地方長官に対し開催の意思を10日程度のうちに回答するようにと「通牒」した。その結果、回答のあった10ヶ所以上のなかから、地方では大阪府知事が会頭を務める大阪府衛生会主催によって1921（大正10）年3月開催が皮切りとなり、滋賀県、北海道室蘭、広島県など全国を巡回した（東京朝日新聞 1920年11月21日朝刊、1921年8

月31日朝刊、『婦人衛生雑誌』1921年357号）。地方の展覧会では内務省衛生局が展示に用いた品々を貸し出しするとともに、各地方の創意で地方のそれぞれの品を展示する形をとった（東京朝日新聞 1920年11月21日朝刊）。

内務省衛生局による児童衛生展覧会の附帯事業としておこなわれた身体検査は、衛生にかかわる専門職者である医師によって身体の発育を確認してもらう企画だった。児童衛生展覧会では「衛生」の意味を物品の展示によって人々に理解させ普及させることを目的とした。

赤ちゃん審査会では審査会という形式をとることによって、病気や障害がなく、標準以上に順調な発育をみせている乳児を選別し、表彰するプロセスを通じて、生きた身体の展示をしたのである。見方を変えれば、親が自発的に乳児を審査会場という公共の場に連れていくという行為を生み出した。医師からすれば病気や障害のない子どもを診る機会がそれまでなかったのだから、審査を通じて数多くの乳児の計測結果を得る機会となった（大出 2017: 23）。

医師の健康観と一般の人々の健康観のずれを示すエピソードがある。1920（大正9）年におこなわれた内務省衛生局主催の児童衛生展覧会での出来事である。児童衛生展覧会は附帯事業としておよそ一ヶ月間、身体検査を実施した。統括した武崎宗三医師の記録によれば6歳未満の「健康児童に就て執行」した2164名の身体検査において、延べ245人の罹患児数を報告している。報告された病気には消化不良なども含まれているが、百日咳、しょう紅熱、水痘などの伝染性疾患のほか小児麻痺、肺炎、脳水腫、腹膜炎なども含まれていた（武崎 1921）（大出 2017: 28-29）。

「健康児童」の身体検査の場で数多くの病気が医師によって発見された。その結果を受けた親が医師のすすめにしたがい治療をしたのかどうかはわからない。医師にかかるほどのことはない、自然治癒でよいと考える親がほとんどだったかもしれない。また健康保険のないこの時代に治療のために子どもを医師に診せる行為は一部の経済階層に限られていたかもしれない。いずれにしても、

このエピソードからわかることは、医師の「病気」という診断と一般の人々の「病気」という判断とは大きく乖離していたということである。

「衛生」や「健康」という概念を人々に浸透させるには、雑誌や新聞など活字メディアによる効果はごく一部にとどまっていたからこそ、乳幼児であれ就学児童であれ健康な子どもたちの身体の見せびらかし＝展示が有効だと考えられたのだろう。

衛生局による身体検査では1920（大正9）に「健康児童」という言葉が用いられたが、1930（昭和5）年にはこの言葉を用いて、朝日新聞社が主催の「全日本健康児童表彰会」というイベントを企画している。後援は文部省である。図1の記事は1930（昭和5）年2月11日朝刊に掲載されたものである。東京朝日新聞は表彰会がおこなわれる同年5月5日が終わった後も、表彰児童を招待し「東郷元帥（が）力強く健康児に訓示」や「東久邇宮に拝謁」の機会も写真入りで紹介した。これらの記事数は同年だけで30件を超えている。

朝日新聞社主催による健康児童表彰事業はその後も毎年行われ戦時下も続けられた。表彰事業は1946（昭和21）年～1948（昭和23）年は中断し、1949（昭和24）年に再開されている。その後、健康優良児・健康優良校の表彰と形を変えつつも表彰事業は1970年代末まで続いた。朝日新聞が報道した表彰事業関連記事数は戦前から戦後まで

700件以上に及んでいる⁽¹⁾。健康児童表彰事業については高井昌吏・古賀篤（2008）が「健康をテーマにしたメディア・イベント」として、戦後を中心に新聞メディアの言説を中心に分析している。

朝日新聞社主催の表彰事業は小学5年生の「健康児童」を対象としたものだが、厚生省主催・毎日新聞社後援による「赤ちゃんコンクール」は1950年代から1960年代にかけておこなわれた。厚生省主催であるからその実施方法は、まず地区保健所単位で選出し、予選を勝ち抜いた候補者のなかから「日本一の赤ちゃん」を選ぶトーナメント方式だった。類似の事業は図2にある通り、NHKもおこなっている。NHKは1950年代から1960年代にかけて実施し、記事によればその模様をテレビで放映した（朝日新聞1961年3月9日朝刊）。

このように新聞メディアやNHKは「健康」な赤ちゃんや児童を写真や映像として全国にその存在を知らせ、表彰し、さらに健康な子どもを育てた親や家族、特に母親を表舞台に出し顕彰した。

吉見俊哉は「メディアとイベントの相互作用」を考察する上で「メディア・イベント概念の諸相」を3つの水準に分けている。すなわち1) メディアが主催するイベント 2) メディアが媒介するイベント 3) メディアによって構成される現実、である（吉見1996:3-5）。

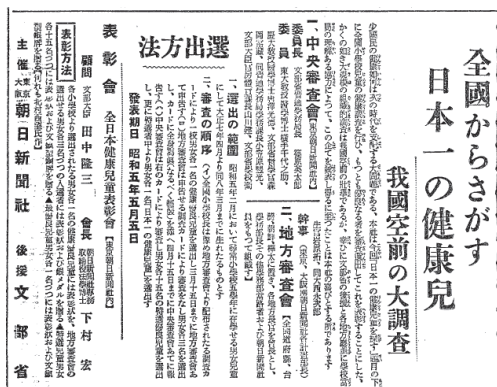


図1 全日本健康児童表彰会
（東京朝日新聞 1930年2月11日朝刊）



図2 NHK第八回赤ちゃんコンクール
朝日新聞1961年3月9日朝刊

赤ちゃんコンクールや健康児童表彰会は全国的な新聞メディアや放送メディアが日本各地の子どもの親や家族に働きかけ、健康や発達の程度を指標に競い合わせ、最優秀者を選び表彰した。それら一連の事業を通して「健康児童」を写真や映像で示し、最優秀者には表彰状に加えさまざまな特典、たとえば皇居を訪問し「両陛下お励まし」を受ける機会や、「子ども大使」として訪米するといった副賞が与えられた。発育がよいこと、健康であることが表彰の対象にあることをメディアは全国に伝え、さらには望ましい子ども像までも伝える役割を果たしたのである。



図5 「子ども大使」として健康優良児訪米
朝日新聞1964年1月5日朝刊



図3 皇居訪問と「両陛下からお言葉」
朝日新聞1952年11月4日朝刊



図4 朝日新聞 社告(1面中央)
朝日新聞1955年11月3日朝刊

2. 「健康」と「衛生」と児童保護の時代

戦前日本でおこなわれていた赤ちゃん審査会というイベントは、元気な子どもの育ちを評価し親子を顕彰するという目的とともに、それを通じて健康であることのメディアとなった。その背景には日本が近代化を遂げつつある一方で、統計にあらわれた乳児死亡率が他の先進諸国と比較し一向に減らないばかりか上昇を続けていたことに対する危機意識と早急の対策を必要とする国家の認識があった(大出 2017:26-27)。

先に医師の健康観と一般の人々の健康観のずれを示すエピソードを紹介したが、ではこれだけのずれを背景として、「衛生」や「健康」という概念はどのようにして人々に浸透していったのだろうか。

鹿野政直によると「健康」という言葉を定義したのは、幕末の緒方洪庵編述『病学通論』(1849年)を嚆矢とするという。鹿野は幕末から文明開化期の英和・和英辞書における health の訳語、kenko(健康)の訳語の変遷を通して、健康の常用化は文明開化期を経てからだと述べている(鹿野 2001: 7-9)。当時の言葉が社会に定着し、人々が日常生活で使用するまでには多くの時間を要していたことは容易に想像がつく。

鹿野はそれまで人々が用いていた「養生」から「健康」へと目標が変わったとして、これを「近代の健康観の成立」だとしている。

個人個人の健康は、それが私事であるゆえに公事と位置づけられた。「健康」の語の常用化は、積極的な獲得目標としての健康、「公益」と関連づけられた健康という、あらたな健康観の成立と無関係ではなかった。その意味で、維新後ほぼ十九世紀末までの時期を、「健康」の時代と呼びたい（鹿野 2001: 12）。

こうして鹿野は「健康」の時代は明治以降に成立し、19世紀末までとし、20世紀から1945年8月の敗戦までをさらに「体質」の時代と「体力」の時代に区分し、戦前日本は「健康」と「体質」と「体力」の3つの時代に分けられるとしている。鹿野がいう「健康」の時代から「体質」の時代、そして「体力」の時代へと区分できるほど、「健康」という言葉は十分普及していたのだろうか。彼の時代区分では当時の日本社会を説明する上で無理があり、むしろ「健康」と「衛生」が併存した時代というのがふさわしいと考える根拠として次の2つ挙げる。一つは日本の住居に関する民俗学者高取正男の考察ともう一つは1925（大正15）年の山梨県のある家族（親族）写真である。

「住まいの原感覚」という論文において、高取正男は伝統的な農家の住まいと衛生について触れ、農村における生活改善運動は戦前から戦後にかけておこなわれたが、その最大の眼目は「寝室における万年床の追放」だったという。農家の寝室の多くはナンド（納戸）とかヘヤ（部屋）と呼ばれる薄暗い小部屋で「日光はもちろん、新鮮な外気からも遮断された場所で、ふとんはいつも敷き放しの万年床というのが、一般に農家の通例」だったという。これに加え、日本にはふとんに白い敷布（シーツ）をかける習慣がもともとなかったこと、山川菊枝が母親である青山千世の明治初期に寄宿舎で出会ったシーツに驚いたというエピソードを紹介している。

「衛生」という言葉は、それまでの「養生」という言葉とは質的にちがっている。養生とは生命の根源と思い、信ずるものを暖かく養おうとするものであり、衛生とは生命の維持に害の

あるものを撲滅し、病原や病巣とみられるものを論理で追詰め、あらかじめ掃滅しようとする意志的態度に属している。（高取 1976: 186）

現在ではあまりにも慣れ親しんだシーツだが、高取によればふとんのシーツは明治以降、まず都市の中流以上の家庭からはじまったのであり、「ふとんに掛けられた真白なシーツは、こうして旧来の陋習をうち破ろうとする文明開化の、ひとつのシンボルであった」。青山千世が寄宿舎のシーツに驚いたのが明治初期であった一方、農村ではシーツをかけない万年床で就寝する習慣が戦後まで続いたということである。これらを踏まえて高取は次のように述べる。

（文明開化というものは）地域的にも階層的にも、時には個々の家ごとに時間的に大きな偏差をはらんでいる。生活文化の近代化が完了したといえる状態になったのは農村では最終的に第二次大戦後といってよい。（高取 1976: 187）

高取の以上の考察と戦後間もない日本の農家世帯が50%以上はあったことを考えると、衛生や健康という概念が日本社会に広く定着するのは1950年前後と考えた方がよいと思われる。

もう一つは大正末期の「健康記念」の写真である。図6は1919（大正8）年生まれの子どもの母が5歳の頃、自分の母方の親族と一緒に撮影した



図6 「大正14年中田家健康記念撮影」写真

記念写真である。写真の上に「西山梨郡住吉村田中家健康記念撮影・大正十四年二月二十二日」という記載がある。田中家の家の前で撮影したようだ。この記念撮影に参加できなかった小学生と中学生くらいの男子が囲みの写真で登場する。大人の男性は紋付袴姿か洋装、既婚女性は黒留袖を着ている。中学生の男子は制帽をかぶり制服姿である。一族郎党が正装で集合写真を撮るのだから、この日は本当に特別な日だったことがわかる。母の家族は祖母の実家である田中家からバスで1時間以上はかかる場所に住んでおり、「健康記念撮影」のために正装して夫と5人の子どもを連れ、祖母の実家まできたのである。

1925（大正14）年、山梨県の片田舎における「健康記念撮影」とそのために一族郎党が集合するという行為からわかることは、「健康」を記念すべきこととして受けとめ、ハレの行事として皆で祝ったということである。このようなことが山梨県内でどのくらい行われ、他の地域ではこうしたことが行われたのかどうかは不明である。しかし、大正末期に「健康」という言葉は新鮮で近代的な、地方農村地域からすれば「啓蒙」的な響きをもって迎えられたことが推測される。

以上の考察から、人々の身体に直接かかわる事象で、しかもそれまで存在していなかった「衛生」や「健康」という概念は、人々の集まりの機会をメディアとして徐々に浸透していったと考えられる。しかし都市部ではこれと対照的に、公民館や学校など公的な場所でおこなわれた衛生展覧会や赤ちゃん審査会がその役割を果たし、さらにはその会場を提供した三越や高島屋など大手百貨店が後援し、衣服や粉ミルク、玩具など、最先端の消費を組み込む形で開催された。

香西豊子が「衛生」および「健康」概念について、『種痘というく衛生』という大著のなかで、「衛生」の発見者で命名者である長与専斎の『松香私志』から、次のようにまとめている。

おそらく当初、長与が（視察先のベルリンで知った）「ゲズンドハイツブレゲ」等の言葉から描いたのは、一身の保全をはかるという個

人的な「養生」の営みであった。だが、欧米諸国での視察で目にした「健康保護」のありようは、自明のそれとはまるで異なっていた。「健康」とは、個々人ではなく国民全般の健康をさすのであり、その「保護」とは、国家の一つの行政機能だったのである。（香西 2020: 21）（下線部引用者）

香西は、明治初期にヨーロッパ視察を経て長与が「個々人の命は、集会的にとらえられ『健康保護』という操作の対象とし「国家は諸科学の知見を援用して、組織的にその命を管理」すること、そのために「国家による国民の『健康保護』」を担う行政組織として（近世の「衛生」の用法ではなく）新たに意味を与えたく衛生＞を採用したとしている。

まとめるなら、明治以降に使用されるようになった「健康」と「衛生」とは、そもそも導入時において国家による国民の命の管理をさす意味を与えられていたこと、人々の日常の営みから生まれた言葉ではなく、近代化とともに国家による国民の生命の管理のために導入されたということが香西の考察から確認できる。

1925（大正14）年山梨県の「健康記念撮影」写真も児童（または乳幼児）衛生展覧会も「見えづらい」（香西 2020: 21）概念だからこそ、言葉の意味を伝えるよりモノの展示やコトを通じて、く衛生＞の普及を目ざしたといえる。

3. メディア・イベントとしての赤ちゃん審査会

「赤ちゃん審査会」が始まった頃、いくつかの呼び名があった。前出の「赤ん坊展覧会」（西山哲治）、「赤ん坊審査会」（梅光女学院）、「乳幼児審査会」（三重県社会事業協会）、「赤ん坊審査会」（大阪児童愛護連盟）など名称は統一されていなかった（大出 2017: 30）。しかし共通しているのはその形式が、子どもの身体を計測し、健康状態を医師が判断し、優良・佳良といった順位を与える点だった。

本論ではこれらの具体的内容と機能を知るため

表1 堺市赤ちゃん審査会の開催概要と写真帖（帳）タイトル一覧

回	出版年	開催日時	開催場所	写真帖（帳）表題
第1回	1928	1927年 12月9日～11日	殿馬場 旧市立高等女学校跡	お産と育児の展覧会・乳幼児審査会 記念写真帖
第2回	1929	9月21日～22日	堺市材木町 元愛泉女学校	第二回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帖
第3回	1930			(不明)
第4回	1931	10月4日～5日	堺市殿馬場 府立堺高等女学校	第四回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帖
第5回	1932	10月1日～2日	堺市殿馬場 堺高等愛泉女学校	第五回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帖
第6回	1933	10月7日～8日	堺市殿馬場 愛泉高等女学校	第六回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帖
第7回	1935	10月5日～6日	堺市殿馬場 愛泉高等女学校	第七回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帳
第8回	1936	10月3日～4日	堺市殿馬場 高等愛泉女学校	第八回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帳
	1937	「時局により」開催中止		
第9回	1938	10月16日～17日	堺市殿馬場 愛泉高等女学校	(不明)
第10回	1939	10月7日～8日	堺市殿馬場 愛泉高等女学校	(不明)
第11回	1940	10月12日～13日	堺市殿馬場 愛泉高等女学校	紀元二千六百年・第拾壹回堺市赤ちゃん 審査会 記念写真帳
第12回	1941	10月11日～12日	堺市大浜公会堂	紀元二千六百一年・第拾貳回堺市赤ちゃん 審査会 記念写真帳
第13回	1942	10月17日	堺市大浜公会堂	大東亜戦争一周年・第拾参回堺市赤ちゃん 審査会 記念写真帳

注1. 開催場所と表題は大阪府助産師会保管の史料（写真帖）の記載にしたがった。

注2. 第3回（1930年）は『助産之葉』第416号（1930年11月）に堺市大浜公会堂での赤ちゃん審査会表彰式が報告されている。したがって審査会の開催は確認できるが『写真帖』の発行は不明である。

注3. 1937年は「時局の為に休会」したという記録が残されている（『助産之葉』第511号（1938年10月））。

注4. 第9回（1938年）と第10回（1939年）は共に、赤ちゃん審査会と表彰式が開催されていることは確認できている（『助産之葉』第511号（1938年10月）、第512号（1938年11月）、第523号（1939年10月）、第524号（1939年11月）参照）。しかし、『写真帖』の発行は不明である。

に、事業を記録した2つの写真帖、すなわち大阪児童愛護連盟による「赤ん坊審査会」とこれを母体とする全日本児童愛護連盟の主催による「赤ん坊審査会」を記録した『全日本児童愛護運動写真帖』（1936年）と、大阪府堺市産婆会が主催し1928（昭和3）年から13回にわたって開催した「堺市赤ちゃん審査会」とその記録である『堺市赤ちゃん審査会写真帖』（1928年～1942年）を用いることにする。

堺市赤ちゃん審査会の写真帖を用いる利点は表1に見るとおり、途中の欠落はあるが第1回から第13回まで写真帖が残されていることである。大阪児童愛護連盟がそのきっかけをつくった『全日本児童愛護運動写真帖』は戦前日本における赤

ちゃん審査会の全国的広がりを横断的にみることができる。これに対し、堺市の赤ちゃん審査会は縦断的に一地点の経年変化をみることができる。

次節からメディア・イベントとしての赤ちゃん審査会が果たした役割、すなわち1920年代の児童愛護という思想が1930年代から1940年代にかけて健民思想へと変容していくプロセスを跡づけていくことにする。

3-1. 大阪児童愛護連盟と『全日本児童愛護運動写真帖』⁽²⁾

大阪児童愛護連盟は『子供の世紀』の出版を通じてその先進的取り組みが知られている⁽³⁾。大阪児童愛護連盟が主催する「赤ん坊審査会」は堺市

より5年早く、1922（大正11）年10月、大阪市立市民館（後の北市民館）で第1回が開催された。1924（大正13）年には第2回が開催され、以降も継続された。後述するが、大阪児童愛護連盟のこれらの実績と協力によって、堺市産婆会は第1回の「乳幼児審査会」を開催することができた⁽⁴⁾。

大阪児童愛護連盟は「赤ん坊審査会」を大阪市で開催し、東京では2回開催している。第1回目の東京開催は1925（大正14）年10月に東京芝公園協調会館において、第2回は1926（大正15）年7月に東京三越を会場としている⁽⁵⁾。第2回の「赤ん坊審査会」は東京以外の各地から乳児を集めることができたため、連盟主事の伊藤悌二はこれを「全国的運動」のはじまりだと『子供の世紀』第4巻第7号に記している⁽⁶⁾。後に伊藤は日本児童愛護連盟の連盟主事を務めることになる。

日本児童愛護連盟は「300有余」の加盟団体から成り、第1回連絡大会を1926（大正15）年5月、東京で開催している⁽⁷⁾。各地で開催された赤ちゃん審査会の模様は『全日本児童愛護運動写真帖』に残されている。

『全日本児童愛護運動写真帖』は1929（昭和4）年と1936（昭和11）年の2回出版されており、この写真帖そのものが、近代日本における「児童愛護」思想の全国的広がりをよく示している。ただしこれ以降のまとまった写真帖がないため、大阪児童愛護連盟と日本児童愛護連盟による「赤ん坊審査会」のその後はわかっていない。この意味で堺市産婆会主催の赤ちゃん審査会が写真帖として残されているのは定点観測の形で年次別変化がわかり重要である。

1936（昭和11）年版の『全日本児童愛護運動写真帖』には大阪児童愛護連盟主事の伊藤悌二が序文を寄せている。それによれば、同写真帖「第一巻」は1929（昭和4）年、昭和天皇が「大阪行幸」の折に大阪市立北市民館を訪れたことを記念して編纂されたとある⁽⁸⁾。大阪児童愛護連盟の設立は1921（大正10）年であり、写真帖の発行は連盟設立から8年目にあたる。「第一巻」の所在が確認できれば、全国的な「児童愛護運動」を先導する役割を果たした大阪児童愛護連盟の活動を写真で

みることができるはずだ。

現在残っている1936（昭和11）年版の『全日本児童愛護連盟写真帖』は「日本児童愛護連盟設立十五周年」を記念して「運動史の第二巻」として刊行されたと記されている⁽⁹⁾。この記述によれば、日本児童愛護連盟の起源は大阪児童愛護連盟の誕生と同年となっているから、連盟主事の伊藤はこの二者を区別していないことになる。

「第二巻」の写真の多くは1934（昭和9）年と1935（昭和10）年に集中している。開催地でいえば、東京と大阪で開催された審査会が中心であるが、朝鮮、台湾、北海道、和歌山、奈良、名古屋で開催された審査会も紹介されている。

3-2. 健康な子どもと母親の表彰事業

大阪児童愛護連盟が大阪市立市民館で第1回目を開催した時は「赤ん坊審査会」という名称だったのだが、同連盟が当時の文部大臣を総裁として1925（大正14）年、東京で開催した第一回目は「東京乳幼児健康診査会」と表記されている。しかし、『子供の世紀』第一巻に残されている当時のチラシには「乳児と幼児の健康診査会」とあり、ここでも名称は不統一である⁽¹⁰⁾。

『全日本児童愛護運動写真帖』には、乳児の身体検査の様子や「優良児」の表彰式が記録されている。審査会の主人公である子どものほかに、母親、身体検査をする医師、診察以外のすべてを行う実働部隊としての産婆や看護婦が多数登場する。さらに開催地の知事や市長、審査会場を提供した高島屋や三越の取締役ら幹部、時には文部大臣または代理として文部大臣夫人、皇族の女性が参加する。これらの参加者や来賓は赤ちゃん審査会が国家として注目されるべきイベントであることを雄弁に語っている。

参加する母親たちの多くは髪を結い上げ、化粧をした晴着姿である。高島田の結髪、当時流行のモダンな髪型の和装姿、さらには洋装姿も見られる。審査会場には紅白幕が張られ、会場を提供した百貨店のロゴ入り紅白幕が審査会の背景に映る。百貨店にとっては集客の絶好の機会であり広報の機会だったのである。これらから赤ちゃん審

査会はその子どもの親、特に母親にとってハレの舞台であったことを写真帖が示している。

『全日本児童愛護運動写真帖』に収録された各地の写真のなかでもっとも多いのが「全東京乳幼児審査会」である。次に「大阪赤ん坊審査会」,「中京乳幼児審査会」(名古屋),「奈良五条児童愛護大会」,「和歌山乳幼児愛護大会」や大阪・岸和田,という具合に東京以南が中心である。遠くは北海道・札幌,朝鮮京城,台湾台南での開催の様子も写真に記録されており,当時の赤ちゃん審査会を含む児童愛護運動が国家を挙げての催事であったことがここでも示されている。1925(大正15)年から1935(昭和10)年まで,全国各地で開催された赤ちゃん審査会は以上のような特徴をもっていた。

次に大阪府の『堺市赤ちゃん審査会写真帖』をとりあげる。特に第1回目の堺市産婆会主催「お産と育児の展覧会」は赤ちゃん審査会(第1回は「乳幼児審査会」)と同時開催であるため、地方開催の経緯とその具体的内容の紹介をする。

3-3. 『堺市赤ちゃん審査会写真帖』の変遷：

児童愛護運動から健民運動へ

堺市赤ちゃん審査会第1回は1927年（昭和5）年12月「お産と育児の展覧会」と同時開催だった。「お産と育児の展覧会」は堺市産婆会が独自に主催したものであることは第1回の写真帖に記されている。第2回は1929（昭和4）年9月に行われ、それ以降は毎年10月が開催月となった（第3回については所蔵がなく未確認）。

これまでおこなった史料調査によると、産婆会主催の赤ちゃん審査会はおそらく全国で堺市だけかと思われる。当時の日本の産婆会の多くは男性医師や衛生課長が会長を務めており、堺市産婆会も同様だった。そのため写真帖には産婆会長の男性医師の挨拶は登場するが、産婆たちは集合写真か審査会場で立ち働く姿でしか登場しない⁽¹¹⁾。

図7は第1回写真帖の口絵では2枚目に登場する開催時の集合写真である。一列目に並ぶのは医師5名と伊藤悌二大阪児童愛護連盟主事、後方は6名中4名が棚橋堺市産婆会会長を含む医師（内

1名は衛生課長), 牧師1名, 他の1名は後援者と思われる。図8は口絵として3枚目にあたる。堺市産婆会の産婆たちは2列目から4列目に位置し, 最前列は男性幹部と医師が並ぶ。審査会総裁の大阪府知事と会長の堺市市長の写真は図7より手前の、口絵としては冒頭に位置する。



図7 「第一回堺市乳幼児審査会幹部及後援者」



図8 第一回「堺市児童保護週間各関係者総動員」

第1回開催の棚橋産婆会長による挨拶は冒頭に登場するが、開催までの経過は無記名(産婆)の「事業の起源及準備時期に於ける活動状況」として2ページにまとめられている。それによると堺市は「乳幼児の死亡率は我国人口五万以上の五十六都市中の第五位」という「戦慄せざるを得ない」状況にあり、「(その原因は) 第一に育児とお産の知識が普及して居らぬのが大なるものであらうと考へ(中略)、お産を直接に取扱ふ私達(=産婆)

の集りで是非此の展覧会をやって、国家社会の為に聊かでも貢献致したい」と考えたことがきっかけだとある。

堺市産婆会の有志は展覧会用の資料を集めるために大阪市の原田智夫医師を訪問し展覧会実施計画を相談している。棚橋産婆会会長が大阪児童愛護連盟主事の伊藤悌二と会見したのも原田自宅だとある。原田は産婆法制定運動の実質的な基礎を作った医師で、産婆にも医師にも人望が厚い人物だったことがわかる（大出 2018: 221-224）。10日ほどの「東奔西走」と会員の「大に協力奮闘努力」が実を結び、5日間の来場者が19,591人という「奇蹟的結果」を得ることができた。

二萬人の入場者を呼んだ展覧会



公民館の中の一つの会場である「お産と育児の展覧会」は、何千人かは来ないとも推測の余地で、最も大勢と推定されるのは本館であった。その一階と二階はそれぞれ別の入口から入れられ、それぞれで入場券を渡す。館内には、各一階と二階に分かれて展示されている。

図9 お産と育児の展覧会風景
「二萬人の入場者を呼んだ展覧会」

図9はお産と育児の展覧会の会場「風景」である。展覧会のためにポスターが掲示され、乳児のための食事が展示された。さらに病気や妊娠の理解を目的とした模型のほかに、「展覧会出品目録」によると「一ヶ月より十ヶ月マデ胎児アルコール漬」「奇形児」「三胎児・無脳児」なども並べられた。

会期中は講演会が開催され、堺市立高等女学校で約1000名を対象に3名の講師、府立堺高等女学校で約1000名の女学生に向けて3名の講師が講演をしている。講師の一人、大阪市立産院長・医師余田忠吾は「将来の母性たちへ」と題し「国家の将来を支配する赤ん坊を産み育てる」ことの重要性を繰り返し説き、女学生に対し「国家に至

大の忠を盡さること（略）は尊い勤め」と強調する。

別の講演会場の福助足袋工場では女工と男工を分け、約4500名を対象に5つの集会に分け各3人の講師による講演をおこなっている。このうちの一つの講演タイトルは「先天梅毒と小児結核」である。女学生には出産育児を通じて国家に貢献することを強調する一方で、足袋工場労働者には具体的な病気予防や対策といったテーマが選ばれている。

第1回は堺市産婆会が主催とあるが、「審査会規定」には「堺市産婆会・大阪児童愛護連盟主催」と記され、このイベントの先行者である大阪児童愛護連盟の協力によって実現にこぎつけている。しかし第2回には大阪児童愛護連盟は後援団体の1つとなり、第3回以降は登場しなくなる。堺市産婆会が独自の活動として単独開催が可能になったことを示している。

写真帖の年ごとの変化はその表紙と冒頭の挨拶に象徴的に示される。第8回目までは主催団体の堺市産婆会長棚橋馨石の「ご挨拶」が冒頭に掲載されているのだが、第11回目以降は赤ちゃん審査会総裁を務める大阪府知事や堺市長の「告辞」、厚生大臣の「祝辞」がその前に並び、そこに軍人の写真が登場することになる。

第13回目には厚生大臣と当時の陸軍大臣東條英樹が並ぶ（図12参照）。棚橋堺市産婆会長の挨拶も児童愛護ではなく、母親に向けて「育児奉公」を呼びかける。総力戦体制下において赤ちゃん審査会の開催は困難になり、それ以降は中断されたようだ。堺市の場合はそうであるが、小学生を対象とした健康優良児表彰事業は先述の通り、1945（昭和20）年まで朝日新聞社によって続けられており、健康であることが公益であるという位置づけは戦時下の日本でより強化されていたのである。

図10は『第八回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帳』（1936年）の表紙であり、図11は第13回目の『大東亜戦争一周年・第拾参回堺市赤ちゃん審査会 記念写真帳』（1942年）と記された表紙である。第9回（1938年）、第10回（1939年）

分の欠落は惜しまれるが、第 11 回の表紙は第 8 回から大きく変容し、「人的資源ノ拡充強化」が常套句として表彰する知事や市長らの挨拶で繰り返される。



図10 第8回写真帖表紙



図11 第13回写真帖表紙

「健民強兵」「健児報国」「健児宝国」「鳳雛」「優生報国」「興亜と鳳雛」(12回, 13回)等の「賛辞」が、軍人の揮毫に選ばれ、表彰状とともに「最優良児」らに手渡された。子どもを産み健康に育てる「母性」もまた「忠孝貞節」として表彰の対象となる(第12回)。子どもを産むこと、そして子どもを健康に育てることが国家のために手段化されていくプロセスを写真帖から明瞭に辿ることができる。



図12 第13回「審査会に寄せられた讃辞」

子どもの生命を病気から守り、元気に育てること、その結果として乳児死亡率を下げることを目的として始まった赤ちゃん審査会は、戦争に勝つための「皇国を双肩に荷うべき大御宝」である小さな国民を表彰する場となり、子どもを産み育てた女性は「優良児の母性」として公的な価値を付与され称揚されたのである。

4. 赤ちゃん審査会がはたした役割

赤ちゃん審査会が誕生したのは、日本の高い乳幼児死亡率が社会問題として雑誌や新聞メディアにおいて繰り返された時代だった。欧米諸国では乳児死亡率が近代化とともに低下していったのに対し、大正期の日本では逆に上昇していったことが為政者と知識人に強く懸念されたのである。

児童保護、児童相談、母子衛生、健康などの概念が日本社会に登場し定着していく上で、それまでになかった言葉が実感をもって人々に十分理解されるに至っていなかった。こうした時代に、赤ちゃん審査会は健康な乳幼児の実物展示を通じてこれらの概念を浸透させる役割を担った。さらに子どもの母親や家族にとっては、作品としての子どもを通して、医師に評価され承認される場となったから、その人気は年を経るごとに高まっていった。堺市産婆会の例でいえば、第1回目には「堺市児童愛護週間開期中」飛行機で10万枚あまりのピラを空から配布し、「コドモ愛護の宣伝」までしたが、2回目以降は大々的な宣伝がなくとも、

審査対象を制限するほど応募数が増加していった。

赤ちゃん審査会是这样して抽象的な概念としての児童保護、衛生、健康ではなく、測定され診察される乳幼児の身体を通して、人々に理解させる場でありメディアとして、そして望ましいハレのイベントとして社会に定着していったのである。

日本児童愛護連盟の赤ちゃん審査会のように人々の目に触れやすい三越、高島屋、といった都市の最新の商品が陳列される場所で開催された効果も大きかった。大臣や皇族が来賓として審査会場に登場する姿を写真つきで新聞はとりあげた⁽¹²⁾。

その一方で、堺市や山口県のように高等女学校を会場とすることで、「将来の母性」を対象に「母性の涵養」や衛生や健康の普及を効果的に行う場として学校は活用され機能したのである。

赤ちゃん審査会で子どもの身体を診察する医師も、そして子どもを産み育てる母を援助する産婆や看護婦も、戦争に向かう国家の意志をそれぞれに内面化し、赤ちゃん審査会を通じて「健民報国」を伝える役割を果たしたといえる。

堺市赤ちゃん審査会の写真帖は児童愛護の理念が、国家の良質な「人的資源」として活用されることを誇りに思う気持ちへと簡単に接続することや、そのプロジェクトの達成に医師や産婆、看護婦、保健婦ら専門職者がその職務を通じて貢献することで、国家総動員体制が形成されていったことを示している。

付記

本論はJPS KAKENHI JP17K04151の補助による成果の一部である。

(注)

(1) 朝日新聞データベース『聞蔵』において「健康優良児」で検索した結果によると、1930年2月～1945年5月までが456件だったのに対し、1945年11月～1979年3月までが271件だった。戦前の健康優良児表彰関連の記事数は、戦後の半分の15年間に2倍だった

たということになる。

- (2) CiNiiによれば同志社大学図書館と国会図書館が所蔵し、国会図書館デジタルコレクションにおいてインターネット公開されている。
- (3) 大阪児童愛護連盟編纂『子供の世紀 復刻版』第1巻～第15巻、六花出版、2015-2017。
- (4) 堺市産婆会「事業の起源及準備時期に於ける活動状況」『お産と育児の展覧会・乳幼児審査会記念写真帖』1928年に詳しい。
- (5) 伊藤悌二「新時代の意義ある年中行事 第四回赤ん坊審査会を終わりにて」『子供の世紀』第1巻、2015年、316ページ。
- (6) 伊藤悌二「大阪児童愛護連盟の起源及其発達」『子供の世紀』第1巻、2015年、231ページ。1925年に東京芝公園増上寺前協調会館にて開催された「乳児と幼児の健康診査会」（東京の第1回目は満6歳以下を対象としている）の募集要項には「主催 日本（大阪東京）児童愛護連盟」「賛助 内務省衛生局保健課・文部省学校衛生課」と記されている。大阪児童愛護連盟主催としながら、東京で開催する際に日本児童愛護連盟とも記しており、厳密に区別をしていなかったと考えられる（『子供の世紀』第1巻、2015年、91ページ）。
- (7) 日本児童愛護連盟は伊藤悌二によると、大阪児童愛護連盟に端を発していると捉えられており、そのため大阪児童愛護連盟の設立年が日本児童愛護連盟の設立年と考えられている（伊藤悌二「序文」日本児童愛護連盟『全日本児童愛護運動写真帖：連盟創設満十五年記念』日本児童愛護連盟・大阪児童愛護連盟、1936年）。
- (8) 伊藤悌二「序文」日本児童愛護連盟『全日本児童愛護運動写真帖：連盟創設満十五年記念』日本児童愛護連盟・大阪児童愛護連盟、1936年。
- (9) 同上。
- (10) 大阪児童愛護連盟編纂『子供の世紀 復刻版』第1巻、六花出版、2015年。
- (11) 東京府や京都府などでは戦前期に産婆が産

婆会長を務めていたが、全国的にみると一部にすぎない。

- (12) 朝日新聞 1936 年 6 月 17 日朝刊「溜飲下げた文相－平和な赤ちゃん展覧会で満悦－」、1941 年 7 月 20 日夕刊「賀陽宮妃殿下 赤ちゃん審査会を御巡覧」は日本児童愛護連盟主催の赤ちゃん審査会が高島屋で開催されたと報じている。同連盟主催第二回目は 1926 (昭和 1) 年 7 月に東京三越で開催されたが、途中から高島屋に変更されている。

引用文献

- 大阪児童愛護連盟 (2015). 『子供の世紀 復刻版』第 1 巻. 六花出版
- 大出 春江 (2017). 「児童保護運動が健民運動に変わるまで：赤ちゃん審査会とその機能を通じて」『大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究』, 19, 21-35.
- 大出 春江 (2018). 『産婆と産院の日本近代』青弓社
- 緒方助産婦学会 (1930). 『助産之栞』第 416 号
- 緒方助産婦学会 (1938). 『助産之栞』第 511 号
- 緒方助産婦学会 (1938). 『助産之栞』第 512 号
- 緒方助産婦学会 (1939). 『助産之栞』第 523 号
- 緒方助産婦学会 (1939). 『助産之栞』第 524 号
- 鹿野 政直 (2001). 『健康観にみる近代』朝日新聞社
- 香西 豊子 (2019). 『種痘という「衛生」：近世日本における予防接種の歴史』東京大学出版会
- 堺市産婆会 (1928). 『お産と育児の展覧会・乳幼児審査会記念写真帖』堺市産婆会
- 堺市産婆会 (1929-1942). 『堺市赤ちゃん審査会記念写真帖』堺市産婆会 (詳細は本文表 1 参照)
- 高井 昌吏・古賀 篤 (2008). 『健康優良児とその時代：健康というメディア・イベント』青弓社
- 高取 正男 (1976). 「住まいの原感覚」日本生活学会 (編) 『生活学 2 集』ドメス出版. 184-209.
- 西山 哲治 (1913). 『赤ん坊展覧会：附・人形病院』家庭之友社
- 日本児童愛護連盟・大阪児童愛護連盟 (1936). 『全日本児童愛護運動写真帖：聯盟創設満十五年記念』日本児童愛護連盟, 大阪児童愛護連盟
- 武崎宗三 (1921). 『児童衛生展覧会ニ於ケル児童身体検査成績』内務省衛生局
- 婦人衛生雑誌 (1921). 「各地児童衛生展覧会」『婦人衛生雑誌』, 357, 48.
- 吉見 俊哉 (1996). 「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聡廣 (編) 『近代日本のメディア・イベント』同文館出版
- 東京朝日新聞 1920 年 11 月 21 日朝刊. 「今日の話題 児童衛生展覧会地方行」
- 東京朝日新聞 1921 年 8 月 31 日朝刊. 「御机の破損から 謝罪使特派の密議 児童衛生展の出品」
- 東京朝日新聞 1930 年 2 月 11 日朝刊. 「全国から探す日本一の健康児 我国空前の大調査」
- 東京朝日新聞 1936 年 6 月 17 日朝刊「溜飲下げた文相－平和な赤ちゃん展覧会で満悦－」
- 朝日新聞 1941 年 7 月 20 日夕刊. 「賀陽宮妃殿下 赤ちゃん審査会を御巡覧」
- 朝日新聞 1952 年 11 月 4 日夕刊. 「両陛下からお言葉 健康優良児けさ皇居へ」
- 朝日新聞 1955 年 11 月 3 日朝刊. 「日本一健康優良児健康優良校決る きょう晴れの表彰式」(社告)
- 朝日新聞 1961 年 3 月 9 日朝刊. 「NHK 第八回テレビ赤ちゃんコンクール」
- 朝日新聞 1964 年 1 月 5 日朝刊. 「"子ども大使" 米国へ出発 千二百万の小学生代表して」